第八回　映像が見えなくするもの

運動会が近づいてきました。子どもたちは張り切っています。

お父さんも張り切っておられることでしょう。応援に？　いいえ、ビデオ撮影に。このごろのお父さんはすっかりビデオ係ですね。日ごろなかなか帰りが遅くて子どもと関われない。奥さんからは「もうちょっと子どものこと見てよ」と日々言われている。行事のときはがんばらなくっちゃ。がんばっちゃうその力みが、なぜかズームアップへ駆り立てる…のかどうか分かりませんが、ホームビデオでわが子の写り具合はいかがでしょうか。

まさか、かけっこで自分の子どもをアップにしすぎて、一体何等でゴールしたのかわからない、なーんて映像は撮ってないですよね？そこまでしなくても、全園児によるパラバルーンなどはわが子を大写しにしてたらその美しさは写らないし、すみれ組の鼓笛隊演奏はわが子だけ写しても、隊形移動や全体の調和は見えないでしょう。運動会は往々にして、個人ではできないこと、たくさんの力が集まって初めて達成できること、そういう課題であり、そういう喜びを味わうのを目的とした行事です。

空気が読めないことをKYと言うイヤな言葉が流行ってますが、KYって、周りが見えてないってことでしょう。それは自己中心的だからでしょう。子育てにおいては、自分の子どもしか見えないってことにもなるでしょう。ビデオのモニターをのぞいていると、肉眼と比べものにならないほど、視界が狭く限られ、周りが見えなくなります。ビデオカメラという装置を使うことでいつの間にかKYモードにはまってしまうのかもしれません。

見るということの精度が、機械によって上がっています。ズームアップもできるし、ハイビジョンなんて肉眼より鮮明に見えますね。どんどん見えるようになるものだから、それに目を奪われて、その時見えなくなるものがあることなんて忘れてしまう。

でも、見えることによって見えなくなるものがある。精度が上がったところで一部しか見えないという制約から抜けることはない。何かを見てる時、同時に後ろは見えないし、下も上も見えない。歴史的大事件が起こっていても背中を向けていればそれに遭遇できない。

つまり、見ることによって、起こっていることの全体を見失うということです。広い所に自分を、わが子を、位置付けられなくなる。だから「大切なことは目に見えない」のです。

昨年、運動会終了後の保護者アンケートで何人かの方が「応援がなんだか静か」というコメントをしておられました。それは、「運動会がなんか盛り上がりに欠ける」という意味でしょう。なぜだろう。そのカギを握るのが、どうもビデオのようです。ビデオ撮っていて声を出せない、撮ってる人に遠慮して声を出せない。傍観者になって、参加者になれない。そんなコメントもいただきました。

「記録より記憶」なんて言葉もいいですね。

今年は、わが子をモニター越しに黙々と追いかけるのではなく、声がかれるまでわが子に声援を送ってみるというのはいかがでしょうか。